



初期は声の大きい男性の要求が前面に出てしまつ。石巻市のある学校の体育

被災者が避難所で生活する上で大切なことは何か。災害時の公共空間の状況を調査するため、宮城、福島両県の避難所を訪れた名古屋工業大大学院の北川啓介准教授（建築設計、都市計画）に写真に聞いた。（聞き手・林勝）

名古屋工業大

北川啓介准教授

避難所の生活——識者に聞く

館では、乳児を連れた母親や家族を失って落ち込んでいる人たちが、遠慮がちに壁側で小さくなっていた。思春期の女の子は傷つきやすく、嫌気が差して避難所を転

庫を着替えや授乳といった女性専用の空間と決めたり、炊き出しや掃除で女性の手が一齐に必要なときは、交代で数人の幼児を見守る託児所を臨時で設けたり。

適度な自由度必要

々とする家族もいた。女性にとつて共同生活は不便なことが多い。被災から数日たつと被災者同士が話し合い、不便を解消しようと努めていた。例えば、体育館の倉

良好な人間関係がある避難所の特徴は何か。被災者にとつては、設備の充実よりも、近所付き合いや仕事上の人間関係を伴った震災前の日常の時間を取り戻すことが大切になっ

ていた。なじみの人と触れ合える憩いの場所を適度に設けている避難所は生き生きとしていた。テレビの周りには人が集まり、お茶を飲みながら井戸端会議。石巻市内の公民館のロビーはサロンのように使われ、高齢の男性がお酒を飲みながら若者らに昔話をしていた。飲酒は基本的に禁止の避難所が多いが、被災者にある程度の自由度を与えることも大切。住民参加型のまちづくりのような運営が望ましい。

段ボールで作る間仕切りは高さ一辺ほど。立てば隣の人の顔が見える。余震が続いており、被災者らは他の人とすぐに会話ができるように、緩やかなプライバシーを選んでいた。今後、大都市が被災したときに最も心配なのは、互いの信頼関係の薄い不特定多数の人が大規模施設の避難所に集中すること。女性や高齢者、子どものための空間の使い方を事前に決めておけば、トラブルの回避に役立つだろう。

離れても支え合える

大学の夏休みが終わりに近づいた9月末、梨奈さんは福島県会津若松市の仮設住宅から東京に帰った。静けさを取り戻した居間で、幸さんは先日までのにぎやかな日々を振り返った。「家族全員でいると、まるで元の生活に戻ったようだった」
思えば、梨奈さんは家族にとってムード

メーカー的な存在だ。読書が大好きな沙也加さん、ガーデニングが趣味の幸さんはどちらかといえば引っ込み思案。笑顔がトレードマークの光一さんも口数は決して多くない。中学、高校と陸上部で活躍し、大学でも体育を専攻している体育会系の梨奈さんは、自他共に認める「台風娘」だ。
夏休み中、2間しかない仮設住宅でも、お構いなしにしゃべり続ける梨奈さんに、沙也加さんが「これじゃあ勉強できない

原発1キロからの避難
いつの日か

—18—

よ」とたびたびこぼした。でも、目は笑っている。「うちの家族ってアンバランスのようでバランスが取れているんだな」。幸さんはあらためて思った。

梨奈さんが東京に戻った翌日、早速、電話があった。「お母さん、やったよー」。幸さんが携帯電話に耳を押し当てた途端、曇り掛けるような弾んだ声が響いた。大学の寮に届いていた1学期の成績表が予想以上の出来だったという。

高校受験を控える沙也加さんもそれを聞いて勉強に少し身が入ったよう。「離れていても支え合える」。ふさぎ込んでばかりだった幸さんも少し勇気がわいてきた。

福 (はなわ) さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん(43)と妻幸さん(44)、次女沙也加さん(15)は愛知県豊田市で暮らした後、会津若松市に移った。長女梨奈さん(19)は東京で大学生活。